

# 十七世紀の記録文学(一)

—モットヴィル夫人の「覚え書」—

十七世紀文学の上で、女性の果した役割は大きい。世紀前半のラ  
ンブイエ館以来、次々と現われたサロンの中心として、また宮廷の  
種々のセルクルの主役として、この時代の女性達は、文学の最も慧  
眼な読者であり、観客であり、批評家であり、保護者であった。フ  
ランス文学の中で無視することの出来ない特殊な文体を流行らせた  
ブレシュエズ達も、芸術作品を規則で評価しようとする学者達に対  
抗して、「彼女達自身の中にだけ」、自分達のボン・サンスのみ  
に、評価の規準を求めようという新しい批評の形を示す点で、大き  
な意義を持つと云われる。<sup>(1)</sup>

彼女達の影響力は、文学だけにとどまらない。政治に介入し、陰  
謀をたくらみ、内乱に際しては軍を率いてフランス中を駆けまわ  
り、宮廷と取引し、外国と同盟を結んだりした。

一六五〇年、ピレネ平和条約が結ばれた時、スペイン代表の  
Luis de Haro がマザランに向って、もうこれで平和に国を治め

## 赤木富美子

ることが出来ませぬ、と云ったのに対して、マザランは、フランス  
では、婦人達が必ず厄介事を引きおこすので、大臣というものには、  
決して平和はない、と云って次の様に答えている。「あなた方スベ  
インの方は、屈托なく婦人の話をなさる。彼女達は恋愛事件にしか  
首をつっこみませんか。フランスでは、そうぢやないのです。  
現に今、三つの大きな王国を、治めも出来れば、くつがえしも出来  
る力を持った女が、三人もいます<sup>(2)</sup>」。この三人の女性とは、有名  
なシュールーズ侯爵夫人、ロングヴィル侯爵夫人、バラチナ公妃だ  
とされているが、「マザランはもっと多く、このような女性を枚挙出  
来たであらう<sup>(3)</sup>」ということだ。

政治に文学に、大きな影響力を持っていたこれら十七世紀の女性  
達は、しかし乍ら、古代からの観念、「*fragilis sexus*」<sup>(4)</sup>「弱き性」  
の根本思想に基づく法の下に生き、謙讓と従順を、たたきこまれて  
育った筈なのである。彼女達の受けた教育と云えば、ただ御祈りと

ダンスが出来れば充分で、「タキトスを原語で読むことの出来たスキュデリ嬢や、セヴィニエ夫人は、『賤しむべき』例外」とされた時代であった。<sup>(5)</sup> アンリ四世の孫娘で、王妃アンヌ・ドートリッシュに次ぐ地位にあったグランド・マドモワゼルは、「プラトンも、モンテーニュも、ロンサルも読んだことはなく、ラテン語、英語、スペイン語、それにイタリヤ語さえ知らなかった」。<sup>(6)</sup> 当時の上流女子教育の典型的な一例である。

この時代の女性のおかれた地位を考える時、先にあげたブレシエズ達の運動も、隷属に対抗して、女性の権利を始めて意識した動きだったという点に、大きな意味があるというアダン教授の説が、一そう肯定される。<sup>(7)</sup>

乏しい教育制度と、現代以上に多い束縛の中に育ち乍ら、十七世紀の女性達は、どうしてあのすぐれた役割を果し得たのだろうか。彼女達は、どの様に生きようとし、どの様に考えたのだろうか。この問題は、しかし、それ自身としては、まだそれ程研究されていない様に思われる。

それぞれに個性ある、この女性達の魅力にひかれて、また、素直に真実を求めるなら、歴史は常に、力強い教えを、私達に与えてくれるものだという確信に、支えられて、私は問題の探求に、わずかな一歩を踏み出してみるつもりである。即ち、この小論では、アンヌ・ドートリッシュの傍近く仕えたモットヴィル夫人の「覚え書」とおして、十七世紀、特にマザランの時代から、ルイ十四世親政の始めまでを宮廷に生きた一人の女性の、考え方を辿りたいと思う。

モットヴィル夫人（フランソワーズ・ベルトー）は、一六二一年頃、<sup>(8)</sup> 國王付き侍従、ピエール・ベルトーの、長女として生まれた。ボワローが、「余りに賢明な」と評したという詩人ベルトーの姪に当り、生来の穩かさや賢さを賦与されたという。<sup>(9)</sup> 母がスペイン貴族の家系に属して、アンヌ・ドートリッシュの信頼を得ていたことから、フランソワーズも一六二八年、七才で王妃に御目見得することが出来た。フランスに来てから、スペイン人の侍女を、ことごとく遠ざけられてしまっていた王妃は、母国語を話すこの少女を非常に喜ばれて、六百リーブルの年金を与えられた。しかしやがて、こんな小さな少女も、スペイン語を話すというので、リシュリユーに警戒され遠ざけられてしまう。彼女は母と共に、ノルマンディーに落着き、十七の年、当地の会計院長官であった80才の、ラングロワ・ド・モットヴィルの妻となった。二十才で寡婦となり、やがてリシュリユーが死んでアンヌが摂政となるや、再び宮廷に迎えられ、侍女というその役目以上に、個人的な信頼をうけて、王妃の死まで、傍を離れなかった。だから彼女は、十七世紀フランスの、最も波乱にとんだ時代を、政治の中心人物のすぐ傍で眺めることが出来たわけである。

「覚え書」を書くという計画は、彼女が宮廷に来て、「すぐ心に浮んだものらしい。彼女は、常に多くを観察し、口を出すことは少く、そこ一起る重大なことは凡てノートしていた」といわれる。「覚え書」をまとめた直接の動機は、数多くの誤解を受けられた王妃について、自分自身の見た真実を語りたい、というのであるが、また、いつか楽しみのために読み返して、細部を思出し、いわば人生

を二度自分に与えたいからだとも云っている(覚え書、序)。

直接見なかったことは、年よりの宮廷人にたずね、また王妃自身  
が、「秘密を明かして下さる」(同序) という協力も得て、彼女  
は他の婦人達が、遊びや散歩に費している時間を、この覚え書の執  
筆にあてた。その記述が正確で、信頼に価することは定評になって  
いるが、阿諛追従にあけられる宮廷に暮しながら、控え目で、寛大  
で、しかも正しい判断力を失わないで生きた彼女の人格は、それ以  
上の魅力である。モットヴィル夫人の考えを、「覚え書」の中に迎  
る前に、その人となりを示す例を一つだけあげよう。

一六六〇年三月のある日、グラランド・マドモワゼルと呼ばれてい  
たマドモワゼル・ド・モンパンシェが、ピレネ山脈を見晴らすマザ  
ランの宿舎の窓辺で、モットヴィル夫人と話し合ったことがあった  
。彼女達の話題は、宮廷をのがれてつくる、汚れなき田園の理想郷  
のことになったが、グラランド・マドモワゼルは、帰宅してからも、  
この理想郷の計画で心が一杯になり、モットヴィル夫人に手紙を送  
り、ひそかな文通が、二年間も続いた。彼女達が、そこで展開した  
結婚論は、それぞれに面白いものであるが、グラランド・マドモワゼ  
ルは、(その理想郷では)、人々は、読書と、音楽と、庭の手入  
れ、家畜の世話にのみ喜びを見出し、恋愛は許さず、結婚は厳禁  
するのだと提唱する<sup>10)</sup>。何故なら、「男の人達に、優越を与えたもの  
は、結婚なのだから。そして私達を、弱き性と呼ばせたものは、私  
達の性が、私達を無理に追いやった、この従属の故なのだから。私  
達は屢々、意に反して、家のために犠牲となつて、そこへ追いやら  
れるのです」と云う。モットヴィル夫人も、わずか二年の結婚生活

の後で、「私に返された自由を、この世のどんないいことよりも、  
好ましいと思つてまいりました」と、グラランド・マドモワゼルの説  
に賛成しながらも、「しかし、私は、殆んど不可能なことよりも、  
実際に、普通行なわれていることの方を、大切にしますし、<sup>11)</sup> 姫君は  
天使に命令されるのではなく、人間に命令されるのですから」結婚  
を禁ずるのは不適当だと強く述べ、そういう不自然な禁止は、人間  
の社会に、必ず隠れた悪と混乱を齎すと警告している。この面白半  
分に交わされた議論は、しかし、グラランド・マドモワゼルの、絶対  
の純粹を求める、烈しい気性の才気と、モットヴィル夫人の、穏か  
で正しい判断力を、実に対照的に、浮き出させている。

この穩かで誠実な眼は、宮廷に何を見、何を感じたろうか。十七  
世紀の才女の中で、最も理性を備えた人、と評されたこの人につい  
て、その人生観、女性観を見てゆこう。

先ず、彼女が生涯の最も主な部分を過した宮廷で、どの様に生き  
たかを見てみよう。最初に、彼女の宮廷観を端的に示す一文を引用  
しよう。「……こうして今や、王妃の摂政時代が始まる。我々はそ  
こに、恰も一幅の絵のように、運命のさまざまな変転を見ようとし  
ている。宮廷と人が呼ぶ、この国の気候は、一体どんな性質のもの  
なのか、その墮落はどんなものか、そこに住むべき定めを受けな  
かった人は、どんなに自分を幸と思ふべきか、を見ようとしている。  
空気は、そこでは誰にとつても、苦く、濁っている。全くの幸福の  
中にいる様に見える人々、そこで神の如く崇められている人々自  
身、いつも誰よりも、嵐に脅かされている人なのだ」<sup>12)</sup>。

彼女は何故、宮廷に嫌悪しか感じられなかったのか。何よりも、キリスト教に深く根ざした彼女の道德感が、そこに充滿する全く反對の惡徳を、一しお強く感じさせたものらしい。聖ヴァンサン・ド・ポールが、王妃の尊敬にも拘らず、宮廷で物笑いにしかならなかったのを見て、夫人は、「何故なら、聖書の説く謙讓、卑下、贖罪、純朴は、宮廷を支配している野心、虛榮、利害打算とは、到底相容れないものであるから」（註14に記した如く、以下卷數と頁數のみを記す。I、一六七頁）と述べている。「宮廷では、おべっか者でない人は殆んど見られない。或者は、一層そうであり、他のものは、より少くそうであるだけである」（I、三四二頁）。そこでは、率直は、身を滅ぼすものになり（I、一三四頁、マダム・ド・オートフォールの例）、「最も深刻な悲しむべきことも、凡て滑稽化してしまう宮廷の風によって」（II、三〇八頁）、オメール・タロンが、人民の悲慘を訴えた、「強く、力に満ちた」（II一〇頁）演説すら、宮廷人によって滑稽なものと、笑いすごされてしまう（II一一頁）。「花咲ける宮廷の、無邪気な楽しみも、いつもそれと切離せぬ苦味に毒され、徳と敬虔が、しばらく大切にされているように見えても、忽ち野心や、他の凡ゆる情念が戦をしかける」（III、二六二頁）のである。モットヴィル夫人は、遂には、「善と知っていないがら、それを追求出来ないで、人は非常に苦しむ。欲望や、期待が支えでなければ、宮廷に続けて生活出来るものではない。そうでないものは、辛い事のみで、喜びもなく、そこに生きるのだ」（IV、三〇九頁）と云う。

それでは、どうしてそんな処にとどまっているのか。モットヴィル

ル夫人は、率直に、この矛盾を認める。アンリエット・ダングルテルの子供の伝育女官の地位に推されながら、それが得られなかった時、「私は、之から全く心の平和が得られると思つて、ほつとすると同時に、我々の情念と望みの驚くべき矛盾によって、自尊心をおだてられる利益を失つたことで、心を傷けられた」（IV、三〇七頁）と告白している。そしてその後は、アンヌ・ドートリッシュ（当時母后）に対する愛着のためだけに、宮廷に留まるのだと決心する。けれども、それから二年も経つて後にも、王の、わずかな言葉で、「私は再び生気を与えられ、宮廷というこの悪い国、理性では嫌悪しながらも、本性で好むようになってしまふこの國に、いつも生じる悲しみに、耐える力を与えられた」（IV、三五七頁）と云つているのを見ると、彼女は、静かな觀察を続けながらも、宮廷の華麗な空氣の魅力をも、充分承知していたものと思われる。

「人間の精神が、どちらへ向いても、出会うものは聞ばかり」（I、二四三頁）のこの世に、では、どのように生きてゆけばよいのか。彼女の考えは、「覚え書」に散見される人物評の中に、覗うことが出来ると思われるのだが、モットヴィル夫人は、まず、アルセストの様に、融通のきかない人間嫌いではないし、こちこちの道学者でもなかった。彼女はむしろ、アルセストのような不満家、「焦立ちと激怒なしには、空氣が吸えない人達」（I、三一二頁）を、「度外れな人」に数える（同）。「王に近づいて、道を誤まらせる人々につきもの、おべっかと隸従を憎むと同じだけ、私は、君主達の行いをいつも非難し、寵愛されている人を嫌い続ける

のが、公正愛だと思っている人々の、あやまった理屈に反対です」(Ⅱ、四四四頁)とも云っている。彼女が敏腕という特質を、決して軽蔑しないで、むしろ尊重していることから、これが証される。リシュリーを、王妃の敵として憎んでいたにも拘らず、サン・マール事件では、彼女は、この悲劇の主人公に、全面的には同情していない。事件の発覚を、もっと早く気づいて逃亡しなかった「盲目」(Ⅰ、七九頁)を指摘し、「敏腕さの欠如を、彼等は死で支払った」(同)と云う。

彼女の一番重んじるもの、それは何事にも、中庸で穏当なことである。例えば、シャル騎士の性質を評して、「誉れに満ちた真の貴族である」のに、「時々、烈しい気質が、正しい理性に従って判断し行動するのを妨げる」(Ⅱ一九六頁)と惜しんでいる。また、グランド・マドモワゼルについて、「マドモワゼルは、気性の活潑さで、すること皆を、駄目にしてしまった。…もう少し穏かなやり方をしたら、何でも、もっとよく成功したろうに」(Ⅲ、四六六頁)と批評する。この処世訓を、彼女自身は、常に実行した。アンヌ・ドートリッシュが、政権を手収め、マザランを重用し始めると、王妃の不遇時代の味方は、皆その選択を非難した中に、モットヴィル夫人のとった態度は、「この時期には、どんな事件にも関係せず、ただ王妃の決心に、しずかについてゆこうと決めていた。それで、目に写る凡てのことを、目の前で演じられ、私に何の利害もない劇のように、面白がることしか思わなかった」(Ⅰ、一三三頁)というのだった。だから彼女にとっては、宮廷での利益は、「私が寵遇を得ていた時でも、尊ぶ値打のある本當の善ではない」

(Ⅰ、二六九頁)という思いが、ことある毎に、感じられるのであった。

「覚え書」の全巻を通じて、彼女ほど、自分を大切にし、どの陰謀からも遠く過した人はないのが感じられる。彼女自身、「おかげで、私は、友人達の情念に、まぎこまれることが少く、理性や義務に反すると思われることだったら、友人達の云うことでも、納得出来なかった」(Ⅳ、三七五頁)と云っている。

この態度は、消極的に現われたばかりではない。正しいと思う時には、失寵を蒙った友をも弁護し、或時など王妃に、「あなたは人が善すぎますよ、モットヴィル夫人。彼女の方では、それだけのことを、あなたにしてくれないのは確かですよ」(Ⅱ、二七一頁)と教えられる。また、一六四八年、王妃と父の許しなく、レオポルト大公と、婚約を結ぼうと計ったかで、叱責を受けたグランド・マドモワゼルの、王妃の前で、強力に支持して、遂にその「小さな演説が効を奏した」(Ⅱ、四四頁)程の、実行力も持っていたのである。

しかしこの様に、自分の誠実さを大切にして、どんな派にも参加せぬ女官は、マザランには理解出来なかった。彼は、「世間は、誰も彼も墮落しているものだという彼自身の意見で、私をも判断しているのだ」(Ⅰ、三四六頁)「友人達の不満をききながら、マザランに告げ口しないのは(…)彼の利益に反する多くのことに、私が加わっているのだ」(同)と、疑い、屢々王妃の傍から遠くけようとした。彼女は、「このような非難は、マザランの生来の疑い深い性質を充分示している。廉直の価値を少しも認めず、それを罪と見

なす程、瞞着を好む人間の権力の下で生きるのは、何と不幸なことだろう」（同）と思い、最後まで好意を持つことは出来なかった。それでも、彼女の公平な心は、穏かにその長所をも認めている。「彼は大体において、国の利益に向う、割合誠実な意図を持っている」（IV、一二〇頁）と云い、「これ程の権力を持っていて、これ程の敵の中で、彼ほど容易に人を赦したものはない」（I、一二四頁）点を賞めている。

権力におもねらない、しかも穏かで正しい理性は、彼女の王に対する考え方をも支配している。十七世紀の、あの誇張にみちた、王への讃辭の波の中におく時、その言葉は、何とすばらしく思えることだろう。彼女は先ず、王も権力者も、凡て神の前では無力な存在にすぎぬという確信を、常に明らかにしている。「神は好きな時に、我々の野心に限界をおかれる。……王達や大臣にも、彼等が、自分の運命の主でないと、示されることが出来るのだ」（I三五二頁）。特にこの思想はあの内乱をまじかに見た彼女にとって、一そう強く感じられたに相違ない。「……だが舞台は変って、どんな被造物も、運命の打撃から逃れることは出来ず、王冠を頂いた頭は、他のものより上にあるだけ、その危険に一そうひどくさらされているのだと、凡ての人は知らされる」（I、四頁）と述懐している。

彼女はだから、王者を先ず人間として見る。ルイ十三世について、「最も完全な徳が、いつも同じように強いとは限らない。正しい人も……時々、いや余りに度々道をふみはずす」（I、六四頁）

と云っているように、王達の欠点を、人間の弱さとして受入れながらも、鋭い批判は忘れていない。彼女が生涯の主な時期を、その傍に過ごし、献身と忠誠を捧げた王妃に対しても唯盲目的に崇拜していたのでは、決してない。彼女が最も大きなものと感じた王妃の欠点は、政治をマザランの手に委ねて、しばしばこの大臣の云うなりになったことであつた。これは、「覚書」全部に、再々指摘されているが、次のように、厳しく批判している箇所もある。

「王妃は、正しい理性と呼ばれる凡てのものにより、明察力あるお方であつた。しかし結局、その生れつきの理性にもかかわらず、強く非難されるべき盲目に、好んで目かくしされておられた。王妃の意志は、いつもこの大臣の意志に従わされており、王妃の理性は、この大臣が屈服させようと望むと、忽ちこの幸せな人（マザラン）の意志にまけてしまうのだつた」（I、一五二頁）とか、「王妃はマザランに対して、屢々はっきりした判断を持っておられ、その行為を、いつも諒としてばかりおられるのではないと私は思っていた。……しかし、彼が注意して、王妃の尊敬を保つように腐心していたので、王妃の反省も明察力も、少し曇らされていたのである」（III、三三頁）という箇所がある。また、王妃が本性善意の人であることを常に強調しながらも、一六四五年、多くの臣下を失い、その近親者の歎きの中に、斉された勝利の報に喜ばれる姿を持っておられた。勝利は王者の至福である。個人の不幸を強く分ち合わずに、それを味わうのであるから、尚更のことである。と云って王妃がこの時、人間らしさが少く、（戦死した）すぐれた人々を

惜しんでいないように見えたというのではない。でも結局、彼女は王妃なのである」(Ⅰ、二三三頁)。

この確固とした思想から、次のような鋭い観察も生れてくる。王らしい威厳を示す、ありとあらゆるものに従われた華かな君主の行列を描写した後、モットヴィル夫人は「これは、人民の心に尊崇の念をひきおこすためであり、弱い魂は、通常こんなもので、尊敬を感じるものなのだ」(Ⅱ、九頁)とつけ加えているのである。だからこそ、この同じ著者が、パリの叛徒を前にしての王妃の平静さを讃え(Ⅱ、一八〇頁)、またいつも、そのむらのない気質を述べて、「王妃は、生涯の凡ての行為において、この世でもっともむらのない方であった」(Ⅰ、一七五頁)と認め、長い苦しい病床での忍耐と気丈さを描写する時(Ⅳ、五九章及び六十章)、王妃の秀れた性質は、いっそう明らかに信じられるのである。ここでは王妃は、いつも、一人の生きた女として、しかもすぐれた女性の一人として、鮮やかな姿を現わしている。

このように、現実を正しく捉えることの出来たこの女性が、女というものをどのように見ていたかは、私達が最も興味をひかれる問題である。先ず、この「覚え書」全体が、正しい理性の尊重と共に、その理性の判断を、情念によって忽ち曇らされる人間の弱さという思想に貫かれていることを、思い出さねばならない。「人間は、自分の力も自分の弱さも知らない。我々の欲望が我々を欺けしてしまう。だから、我々を支配される神の力によって導かれるままにならねばならぬ。さもなければ、自分の選択では、善よりも悪の方に、

屢々行動する」(Ⅰ、四〇七頁)という反省が随所に見られる。ところで女性は、特に情念に動かされやすく、このような迷いに陥りやすいのであるから、それだけいっそう、正しい判断に遠い無能なものである。伝統的なこの考は、モットヴィル夫人の心の底にも存在していたらしく、「私は、大事件については、それを底の底まで知ること出来ないし、また、それを注目することも再々忘れる一人の女のやり方で、とおりがりにしか扱わないが」(Ⅰ、三〇四頁)とか、ジャンセニストとモリニストの論争についても、「善と悪との識別を学ぼうとすることは、大変な代価を要するものなので、それを学ぶより、いっそ知らずにいた方がいい。殊に、凡ての悪の原因だと認められている私達女には」(Ⅰ、三二一頁)とかの謙虚な言葉が見られる。彼女が女性に求める第一の美德は、だから謙讓である。王妃に重んじられた女官の一人、ブラサック夫人を賞めて、「：これらの長所を持ちながら、この人は女性の中で、最も謙虚な人だった」(Ⅰ、一二五頁)と云い、後任のセヌセ侯爵夫人には、多くの才能を認めながらも、「謙讓は彼女の精神に大きな場所を占めていなかった……ので完全な人とは言いがたい」(Ⅰ、一二六頁)と評している。更に当時、素晴らしい学識と才能とで、ヨーロッパ中を驚ろかしたスエーデンのクリスタチナ女王を見た時、「彼女は、何事においても、全然女らしくなかった。女に必要な慎しみさえ持っていられないように……、凡ての行動に、男のように振舞おうとしておられた」(Ⅰ、七三頁)と、驚愕している。

当時の法律の根本思想も、女性の無能力と男性への従属を規定し

ており、社会の道徳も男性の自由な振舞いに味方していた。モットヴィル夫人が身近に知っていたルイ十四世の奔放な生活に対しても、その妃、マリー・テレーズは、「殆んど文句を言うことが出来ずに」(IV、三四〇頁) いたのであり、「当時(一六六二年)、そんな値打もないようなつまらぬことに、王妃がすぐ涙を流されたのは皆、彼女が或苦しみを感ずっていて、それについて敢えて文句が云えないところから来ていたのだと、たやすく判断出来た」(IV、三二二頁) という風であった。モットヴィル夫人は、「我々女性の不幸は非常なもので、法をつくった男の人達は、自分達にだけは、その厳しさを取除いたので、公平な神の掟によって、各々が、その行いの報いを受けるのは、天においてのみなのです」(IV、三四〇頁) と歎いている。この様に、モットヴィル夫人の生きた時代の思想は、女性の従属を説き、無能力が法の根底であり、忍耐が美德であった。また彼女も、中庸を好む人の常として、従来の考を、一歩も出てはいなかった。

しかしながら、目の前の現実、それ程簡単なものではなかった。従来の女性観にあてはまらぬ政治的能力を持ち、「摂政時代中、数々の大事を為し、宮廷に大きな変転を起した」(I、一六〇頁) 女性達、宮廷の紳士達も及ばぬ深い教養を持った女性達など、彼女達の休まない活動を、モットヴィル夫人も、知らずにいることは出来なかつた。例えば、大コンデ公の妹、ロングヴィル侯爵夫人はどうだろうか。「最も大きな企みも、最も強い情念も可能な、彼女の魂は、運命が自分をそこにおくかも知れない最高の栄光と尊敬の幻影にまよわれ、……この甘い毒は、その想像力を害な

い、女に通常の徳を軽蔑させ……全フランスの崇拜を得ようという望みで一杯にした」(II、三〇一頁)。彼女は、必要とあらば、ノルマンディーを味方につけ、王に反抗させるため、市民や、兵や、民衆の前で、「力強く演説し、優しく、へり下った懇請を用い、彼女をまもるよう人々を動かすために、何一つ忘れなかつた」(一六五〇年、III、一六六頁)。やがて最後には、逃走を余儀なくされたが、海に落ちて危く溺れそうになりながらも、「力を取戻し、勇気を盛り返すと、彼女は再び危険の中に、とびこもうとした。風は絶えずたかまり、海をゆくことが不可能になったので」、馬をえらび、夜を徹して逃れ進んで行った。「このことは、御附きの侍女も皆そうしたのである」(同)。冒険のみではない。政治的取引もまた、この女性達の得意とするところだった。シュヴルーズ侯爵夫人は、「フロンドの叛徒達に、大公の(前出のレオポルト大公、スベイン領ネールランドの主)、協力を与えさせ、王に反抗する力を与えるのに役立させた」(II、四一六頁)。また、バラチナ公妃は、大コンデ公が、逮捕され、ロングヴィル侯爵夫人がパリを逃れてゆく時、その留守中、「彼女に忠実に役立つことを確約し、また実際、非常な敏腕さと勇氣とで、それを実行した」(III、一四五頁)。例えば、一六五一年、計企を全部そろえた上で、彼女はマザランに大コンデ公の釈放を交渉し、大臣がためらっているのを、「これ以上、事の成就をおくらせることは出来ぬと見て、コンデ公達の利益に加担させた人々との、個別の条約の四つにサインした」(III、二六八頁)。しばらく後には、王妃に味方して身を立てようとして決めた、「この巧妙で敏腕な公妃は、…先ずフロンド党の烈しい熱をさ



まし、ついでコンデ公の心に、フロンド党に対する嫌悪を生じさせ、これが凡ての立役者の利害と感情を変えさせた」(一六五一年、Ⅲ、二九三頁)。「これら凡ての取引が行われている時、彼女は、座褥にあった。そして身の弱りにも関らず、自分と話す必要ある人々凡てと会談しつづけた」(Ⅲ、三〇三頁)。

この様な混乱の時代には、女性は唯、謙虚と無能の中にいたので、家名も財産も、守ることは出来なかった。「その立派な長所によって、多くの点で普通の女性を凌駕していた」(Ⅰ、一〇八頁) エグニヨン侯爵夫人のように、巧みな説得で王妃に訴え、領地をまもった婦人も少なくなつた。モットヴィル夫人が、これら現世の野心に燃えた女性達の行動を決して肯定していかないにも拘らず、普通、女性の美德とはされない長所に、しばしば言及しているのは、この時代の現実を、そのまま受入れていたからだと思われる。例えば、「最も大きな事もなしうる重々しさと共に、非常な朗らかさを持つた」(Ⅲ、一四七頁) プレシ・ゲネゴゝ夫人、「エスプリがあり、氣に入つた主題なら何でも、強力に理論を進めることの出来た」(Ⅰ、三二七頁) グランド・マドモワゼル、「曇りない輝かしい徳と、非常な雄弁と、卓れた魂、氣高い感情、多くの洞察力と理性」(Ⅱ、三九五頁) を備えたモール伯爵夫人など、枚挙に暇がない。更に、「その洞察力あるエスプリは、人間の心の奥のひだひだをも、はかることの出来た」(Ⅲ、二二九頁) サブレ夫人については、「彼女の精神は、大それた偉大で、また見事だったので、彼女の知っている事の多くを知らない男の學者を、私は何人も見た」(Ⅰ、一二頁)とも言っている。

こうして、モットヴィル夫人は、信仰と道徳の教える女性観を肯定しながらも、現実が示す実例によって、決して女性が無知でも無能でもないのを見、それを受入れている。彼女の確かな現実把握の力が、偏見にとられぬ巾の広い女性観察を彼女に許したのを見ると、この人自身の、理性に支えられたすぐれた性質が、再びはっきりと認識されるのである。

更に、女性が、その優しさと謙虚さに、安住してられぬ地位にあるような時には、モットヴィル夫人は、むしろその地位に相應しい生き方を、女性に求めているようである。例えば、グランド・マドモワゼルが、ルイ十四世の妃になりたがったことを弁護して、この王女の感情は、罪には違いないが、正當なもので、何か偉大で許されるべきものがある。何故なら、王の顔立ちや、人柄が、王女にとって魅力だったのでなく、「ただ王妃の冠だけが、彼女の野心の唯一の目的だったのである。だからもし、アレキサンダー大王が、同じ情念のおかげで、あんな不当な征服を、あんなに賞讃されるのなら、彼女もまた、王族出身者として、同じ王冠を頭に頂きたいと希つたとしても、とに角許されるべきではないだろうか」(Ⅲ、四六五頁)と、云っている。更に、アンヌ・ドートリッシュュその人について、「彼女は、善を識別するのに充分な理性を持つておられた。だからもし彼女が、それを何時も擁護する力を持つておられたら、歴史家の筆が、いくら賞讃しても足りない位だったのである。ところが王妃は、余りにも、自分自身を信じず、彼女の謙遜さが、自分は国政について、無能だと思ひこませてしまつたのである」

(I、三七八頁)と惜しんでいる。

以上のように、いつも正しい理性の光に導かれて、自分にも他人にも誠実に生き、しかも現実を穩かに掌握する力を持った一人の女性、一人のすぐれた觀察者の考えを辿って、十七世紀の女性に近づくための一歩を踏み出してみた。著者の人柄にますます魅かれると共に、そこに描かれた世界については、全く盲人が象を撫でる思いがしたことを告白せすにはいられない。目に見える現実を、決して歪めたり、否定したりしなかった人の、「覚書」であるだけに、現実そのものの持つ曖昧さ、考え方の多様さが、そのまま簡単な分析を許さなかったのは、云うまでもない。一番大きな疑問は、これら政治的文化的影響を与えた女性達に於いて、弱き性という自覚は、一体どの様な意味を持っていたのか、というところであるが、この問題は、ただ文学の跡を採すのみでは、解決出来そうもない。もっと広い視野、もっと深い考察をもって、この大きな複雑な時代を見てゆかなければならない。この時代には、社会環境や、その受けた教育によって、さまざまに異なる女性観が、いりまじっていたのだからか。またモットヴィル夫人自身云っているように、「マレムに近い土地は女性に不利」(II、四五七頁)な如く、道徳も、場所や身分によって変化する相対的な觀念にすぎないのか。或はまた、実力のあるところにしか法は味方しないのか。それでは、女性の教育と活動と地位は、どの様な力によって、どの様な変化を、十七世紀に示すだろうか、等というところである。長い時間と、眞実に對する尊敬だけが恐らく、この龐大な問題の答を与えてくれるに違

いな。

註 (1) A. Adam : *Histoire de la Littérature Française*

*au XVIII<sup>e</sup> siècle*, t. II, p. 29.

(2) G. Reynier: *La femme au XVIII<sup>e</sup> siècle*, pp. 28~29.

(3) *ibid.*

(4) G. Fagniez : *La femme et la société française dans la première moitié du XVIII<sup>e</sup> siècle* 1929, p. 138.

(5) A. Ducasse : *La Grande Mademoiselle*, 1938, p. 11.

(6) *ibid.*

(7) A. Adam : *Histoire de la Littérature Française au XVIII<sup>e</sup> siècle*, t. II p. 24.

(8) *Mémoires de Mme de Motteville*, 1886, t. I, (Notice sur Mme de Motteville par Sainte-Beuve)

(9) *Mémoires de Mme de Motteville*, éd. Michaud et Poujoulat, 1886, t. I, p. 1.

(10) *ibid.* p. 4

(11) *ibid.* p. 4.

(12) *ibid.*

(13) *Mémoires de Mme de Motteville*, 1886, t. I, (Notice sur Mme de Motteville par Sainte-Beuve)

(14) *Mémoires de Mme de Motteville sur Anne d'Aut-*

*riche et sa cour*, publiés par F. Riaux, 1886, t. I,  
p. 99.

以下、本文に巻数と頁数のみを（一、九九頁）の如く記す

本文に仏語を入れられなかったので、必要最小限の原名を、引用順に記す

シュヴルーズ侯爵夫人	la duchesse de Chevreuse
ロングヴィル侯爵夫人	la duchesse de Longueville
バラチナ公妃	la princesse Palatine.
フランソワーズ・メル	Françoise Bertaut
ト	
ラグンロワ・ド・モット	Langlois de Motteville
ヴィル	
オートフォール夫人	Mme de Hautefort
オメル・タロン	Omer Talon
シャル騎士	le commandeur de Jars
ブラサック夫人	Mme de Brassac
セヌセ侯爵夫人	la marquise de Sénécé
プレシ・ゲネユー夫人	Mme du Plessis-Génégaud
モール伯爵夫人	la comtesse de Maure
エキユイヨン侯爵夫人	la duchesse d'Aiguillon